

平成28年熊本地震の復興支援としての 学生スクールサポーター派遣の実施と成果

－奈良教育大学における「熊本教育復興支援プロジェクト」の取り組み－

藤田美佳・赤沢早人

(奈良教育大学 次世代教員養成センター (ESD・課題探究教育部門))

About Implementation and Achievement of the Sending School Supporter for the Reconstruction Assistance in
The 2016 Kumamoto Earthquake:

The Activity in “Project Kumamoto Reconstruction Assistance for Schools” at Nara University of Education

Mika FUJITA, Hayato AKAZAWA

(Teacher Education Center for the Future Generation, Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学 2016 年度学長裁量経費「熊本県内小中学校における教育復興支援活動」プロジェクトとして、学生スクールサポーターを熊本県益城町立益城中央小学校に派遣し、学校支援活動に従事させたことに関する実施内容と成果を報告した。2016 年 8 月 22 日から 26 日の 4 日間の支援期間を通して、支援物資の仕分けやプール指導補助などの学校支援活動を遂行することができたことにとどまらず、派遣学生たちが地震による被災状況や子どもたちへの影響について主体的に学びを広げることができた。

キーワード： 教育復興支援 Reconstruction Assistance for Schools
スクールサポーター school supporter
災害ボランティア voluntary disaster relief

はじめに

本稿は、奈良教育大学 2016 年度学長裁量経費「熊本県内小中学校における教育復興支援活動」プロジェクトにより、学校支援活動（スクールサポーター）として、学生を派遣した取り組みの内容と成果に関する報告である。プロジェクト概要および実施の経緯、派遣前のヒアリング調査については、藤田が執筆し、学生派遣にかかる準備と事前研修、現地での支援活動の内容および派遣学生によるリフレクションについては、赤沢が執筆した。

1. プロジェクトの概要

2016 年 4 月 14 日 21 時 26 分および 16 日未明に、マグニチュード 6.5、7.3 の二度の震度 7 を観測した熊本地震によって、甚大な被害が発生し、小中高では休校を余儀なくされた。そこで本プロジェクトは、2016 年夏季休暇期間に学生をボランティア（スクール・サポーター）として派遣し、現地の小中学校における教育活動の支援に従事し、教育面での復興に貢献することを目的とした。その社会的意義は、地震被害からの復興支援の一環として、本学生が、子どもや学校のニーズに対応した学校支援活動を行うことによって、社会貢献することができる

点である。そしてそこでの経験は、教員を目指す学生にとって、教員としての資質や自覚を高めることにつながると考えられる。

そこで、7 月に次世代教員養成センター所属教員の藤田と赤沢が、熊本県および益城町を訪問して現地を調査した。その際のニーズ把握に基づき、参加学生を募集し、事前指導を行った上で、8 月に学生を現地に派遣した。

2. 現地ヒアリング

2. 1. 熊本県教育委員会（学校教育課・社会教育課）

県教委では、地震発生後、教育復興プロジェクトチームを立ち上げ、学校教育課指導主事や県立教育センター所属教員を学校支援員として、小中学校に派遣した。さらに社会教育課、特別支援教育課、高校教育課、人権同和教育課の主幹や指導主事が学校を巡回し、「学校再開にあたって、当該校が必要とする支援ニーズの把握と取次ぎ管理職の支援および学校、避難所の状況や要望等を把握」¹⁾し、県教委との連絡・調整の役割を担った。さらに、県外の臨時採用講師を活用し、学習支援として 26 名を加配した。

その際把握されたのは、被害が甚大で対応すべきことが多岐にわたり、学校のニーズへの対応が難しい状況にあること、教員の負担が大きく、疲弊の課題があること、

中学では受験への不安の声が聞かれることなどが課題として挙げられていた。

社会教育課においては、従来からの取り組みであった「体験活動ボランティア派遣事業」を通じて、大学生・企業・地域住民に「被災地の子供たちへの学習支援ボランティアチーム」を編成しており、義務教育課からは同チームへの参加を提案された。

本プロジェクトでは、当初、同事業への参加を検討したが、宿泊施設として利用可能な国立阿蘇青少年交流の家および県立菊池少年自然の家は、地震被害の影響や、アクセスの問題により利用が困難であることから断念せざるを得なかった。

2. 2. 益城町教育委員会

前震、本震の二度にわたって震度7を記録した益城町の被害は甚大で、益城町交流情報センターミナテラスに避難所が設けられ、同施設に教育委員会が移転していた。

坂本課長補佐へのインタビューにより、町内の中学校2校には、東日本大震災の復興支援に取り組んだ実績をもつNPO法人カタリバが活動をしているとの情報を得た。課長補佐の事前の確認により、同NPOで学校ボランティアを受け入れることが可能であるとの情報は得たが、小学校における支援活動は十分でなく、ニーズがあることが把握できたため、本学独自の学生派遣を目指し、益城中央小学校でのヒアリングを実施した。

学校長との意見交換に基づき、本学からの学生派遣が実現した際には、民間の宿泊施設を紹介していただく確約が取れたため、派遣の実現につながった。²⁾

2. 3. 益城町立益城中央小学校

この度の地震の二つの断層の間に位置する益城中央小学校は、在籍児童が450名(学年により2クラス40人学級、3クラス30人台学級の編成)である。同校は、建屋の損傷が少なかったため、校舎が損壊した木山中学校が学校移転してきていた。

震災後から5月の大型連休明けまで学校は休校であったため、通常7月18日～8月27日の夏休みを16日短縮し、7月28日～8月21日が夏休みで、22日が2学期始業式となる。

これまでの同校では、プールサポートや丸つけボランティア、安全登校指導など、年間のべ2500人の地域の方々が学校に関わる取り組みをしてきており、文科省のコミュニティ構想事業に関する表彰も受けていた。しかしボランティア自身が被災しているため「手が足りない」状態にある。校長によれば、教員の負担も大きく、教育大生であれば、適切な学校支援活動が可能であろうとの判断により、同校で本学生を受け入れていただくことになった。

3. 学生派遣の募集と事前研修

3. 1. 派遣学生の募集

ヒアリングの結果に基づき、2016年の8月下旬、すなわち2学期の始業にかかり、とりわけ学生スクールサポーターの派遣ニーズが高いものと判断した。そこで急遽、次世代教員養成センターならびに教育研究支援課の関係者で協議をし、8月下旬の学生派遣と、派遣にかかる事前研修の実施を行うことを決定した。

学生派遣に関しては、宿泊先の確保や現地までの交通手段の確認、あるいは支援先の益城中央小学校における業務内容の精査等を行った。同時に、学生の派遣を全学に募ることにし、募集条件等について整理を行った。8月3日に全学に送信した電子メールに掲載した募集要領は、次のとおりである。

表1 募集要項

熊本教育復興支援プロジェクト(学長裁量経費)「スクールサポーター」募集について

本年4月14日に発生した熊本地震から100日が経過しました。震度7が2度発生するという甚大な被害を受け、被災地域の学校では、臨時休校を余儀なくされ、5月の連休明けから授業を再開した影響により、夏季休暇を短縮して2学期を迎えます。

本学では、熊本教育復興支援プロジェクトとして、熊本県上益城郡益城町教育委員会・益城町立中央小学校との連携により、夏休み明けの学校支援に携わる学生ボランティアを派遣するため、スクールサポーターを募集します。

参加を希望する院生・学生は、下記の要領を確認し、応募してください。

なお、受付期間は8月3日(水)午後6:00～8月8日(月)12:00まで、メール応募にて先着順に受け付けます。それ以前に申し込まれた方については、無効としますので注意してください。

募集人員：3名

期間：平成28年8月21日(日)近鉄なんば駅西口(OCATビル)22:00出発(高速バス利用)～8月27日(土)近鉄なんば駅西口 7:17分到着

活動期間 8月23日(火)から26日(金)4日間
8月22日(月)夕刻 益城中央小学校にて顔合わせ、オリエンテーション(22日は始業式です)

活動内容：学校教育支援(水泳指導補助を含む可能性がある。)

活動場所 益城町立益城中央小学校

宿泊場所：阿蘇熊本空港ホテル・エミナース
熊本県上益城郡益城町田原 2071-1

宿泊費：大学負担

交通手段：往復とも夜行バス(大阪～熊本)、熊本交通センター～古閑入口(430円)、古閑入口～木山営業所下車(無料)益城中央小学校徒歩500m

交通費：往復の夜行バスは、大学負担。熊本県内での移動は、自己負担
 ボランティア保険：ボランティア保険災害 A タイプに加入（500 円）

3. 2. 事前研修

募集に基づき、2名の学生の応募があった。教育学専修の A 学生および社会科教育専修の B 学生、ともに3回生の男性である。2名の学生に対して、8月9日の17:00-18:00の日程で事前研修を実施した。

研修では、次の資料を配布した。

- 募集要項
- 災害ボランティア活動についての留意事項（ボランティアオフィス提供）
- 九州大学ボランティア活動 10 の心得（同上）
- 参加申込書

「参加申込書」には、過去のボランティア経験として、東日本大震災やその他の災害ボランティア参加経験の有無を尋ねる項目が設けられていた。A・B 学生とも参加の経験は「なし」ということであったので、災害ボランティア活動に関する上記の資料を丁寧に説明し、派遣に際しての留意事情を確認した。

事前研修では、現地まで／および現地での交通手段や宿泊先の立地など、いわゆるガイダンスに係る内容だけでなく、派遣先の益城中央小学校の先生や子どもたちの様子について、ヒアリング調査の内容をもとにしながら、説明を行った。学生は、小学校周辺の建物被災の様子や、地震後の子どもたちの日常生活及び学校生活の状況を熱心に聞き、また質疑応答も活潑に行うことができた。

4. 派遣学生の支援内容

4. 1. 派遣学生の健康状態及び活動内容の管理

8月21日夜に奈良を発った2名の派遣学生は、予定通り22日に来熊。同夕刻に益城中央小学校に事前訪問を済ませたあと、23日より支援活動を開始した。

支援活動期間中、両学生にはウェブを介して大学担当者への「健康チェック表」と「活動日誌」の提出を求めた。遠隔地での、かつ断続的な余震活動が続く地域での支援活動であるため、派遣学生の健康状況と支援活動内容のリアルタイムの把握に心がけた。

「健康チェック表」では、各種の災害派遣ボランティアにおける同種の様式を参照し、「昨夜の睡眠時間」「当日朝食摂取の有無」「食欲の有無」「便通の有無」「体調の良悪」について、活動日の早朝に回答することを求めた。期間中、体力を消費した活動の翌日などに若干の疲れが残っているという報告を受けたが、おおむね良好な体調を保って活動を遂行していることを確認することができた。

「活動日誌」では、活動後に宿泊地で学生同士の活動

振り返りを行わせたあと、当日中の報告を求めた。報告内容は、「本日の活動の概要報告（あったこと）」「明日以降の活動に向けての気付き（考えたこと）」「その他」の3点である。内容は報告翌日早朝に確認し、活動が始まるまでに、必要に応じて助言を行った。

4. 2. 派遣期間中の活動内容

以下には、「活動日誌」にもとづき、支援期間中の活動内容等について示す。

表2 「活動日誌」における「活動概要」と「気付き」

日時	報告者	活動概要	気付き
8/22	B	<ul style="list-style-type: none"> ・バスターミナル到着、空港リムジンバス乗車 ・空港到着、エミナースのシャトルバスに乗車 ・エミナースではなくニッポンレンタカーに送ってもらう ・レンタカーを借りてからホテルにチェックイン ・荷物を置いてレンタカーでホテル前に建設された仮設住宅へ ・ぐるっと一周して見学した後、西原村へ ・西原村風当地区で断層や地割れを見学、崩壊した建物も間近で見る ・益城町中心部へ向かい、黒潮市場前に出来ている仮設市場兼食堂で昼食 ・レンタカーを返却し、九州産交路線バスで木山まで乗車 ・益城中央小学校にて教頭先生と打ち合わせ、内部の見学をさせてもらう ・1時間ほどで解散、その後徒歩で2時間ほど散策、再び中心部へ ・車では行けなかった路地や細道を歩き、被災状況を視察 ・地元産品を買い物し、夕食 ・バスでホテルに帰着、反省 	<ul style="list-style-type: none"> ・街の中をかなり時間をかけてみるのができたので、明日以降の生徒との活動や先生方との会話に活かすことができるかと思う ・校長先生にお会いすることができなかつたので不安
8/23	A	<ul style="list-style-type: none"> ・起床後ホテルで朝食を取り、テクノ団地(仮設住宅群)発のバスで学校へ。下車後田んぼ道を子どもたちとともに抜けて登校。 ・熊本市が独自に行っている学力診断テスト対策用の問題冊子(自主学習用)を学年人数分印刷する仕事や、先日まで避難所になっていた体育館に残されていた2Lベット 	<p>明日は震災・学校支援チーム(EARTH)の研修が放課後であり、条件が合えば参加させていただけることになった。研修内容は主に地震を経験した児童生徒などに対するカウンセリングについて。今日教頭先生に伺った話で</p>

		<p>ボトル 500～600 本分を玄関付近まで移動する仕事を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3,4,6 時間目にそれぞれ 2,5,6 年生のプール指導を行った。プールに入って指導する時間もあればプールサイドからの監視のみの時間もあり、学年・先生のご意向に合わせた活動となった。 ・教頭先生にご飯をご馳走になり、地震直後の様子や地震以降の児童や先生方、他府県からの援助などについてのお話を伺った。 	<p>は、阪神淡路大震災後に被災者（老若男女問わず）が経たという精神的な変化の過程は、今回の被災者にもやはり当てはまるそうである。</p>		<p>している方がいる現状について。特に知人の 1 人は不動産関係の仕事をしており、益城町や西原村が熊本県内においてベッドタウン的な役割を果たしており、「これから発展していくぞ」というときに地震が起きた」など、県民としての感覚を聞いたのが収穫だった。</p>	<p>きたい。</p> <p>・チェックアウトが午前 10 時までであるため、一度フロントに荷物を全て預けて登校し、放課後一旦ホテルを戻ったのちに帰る見通し。小学校への移動手段として使っている仮設住宅発のバスには多数の子供が乗車しており、大荷物で同乗することができないためである。</p>	
8/24	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ホテルエミナース前のバス停からバスに乗り、生徒と一緒に登校 ・前日のプリント印刷の続き ・2 限目の水泳授業の補助(6 年) ・3 限目の水泳授業の補助(2 年) ・プール掃除 ・昼食を 6 年生の教室で食べる ・ジャニーズの嵐が益城中央小を訪問した際に撮られたビデオメッセージを鑑賞 ・5 限目の水泳授業の補助(3 年) ・放課後に保護者が迎えに来る予定の生徒を図書館で面倒を見る ・昨日記述した研修はこの学童のような子どもの預りを行っていた間に終了したので参加できず ・教頭先生に西原村のおすすめのお店まで送ってもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ・日焼けが酷すぎて足の甲が火傷のように腫れ上がってしまった ・体力的にそろそろしんどくなってきているので早く寝る 	8/26	B	<ul style="list-style-type: none"> ・エミナース前からバスに乗り生徒と共に登校 ・各教室の火元責任者の先生名をテプラで作成、張替え ・4 限目に水泳授業の補助(5 年) ・昼食を 2 年生の教室で食べる ・昼休み全力で小学生たちと遊ぶ ・5 限目の水泳授業の補助(6 年) ・先生方の前で挨拶 ・3 年生の先生が帰られるついでにホテルまで送っていただく ・ホテルで杉谷さんに震災、避難所などのお話を聞かせていただく ・空港まで送迎バスで送ってもらう ・リムジンバスに乗り熊本交通センターに向かう ・夜行バスに乗って奈良へ帰る 	
8/25	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学校にて印刷室の整理。全国各地から届いた支援物資（ノート、鉛筆など）を並べ、各棚に陳列品目をネームカードのようなものを書いて貼り付けた。 ・野外プール指導 3 時間。昨日までは快晴であったが今日は雲が多く出たため比較的快適で、雲の偉大さを実感した。 ・A の熊本在住の知人 2 人に会い、震災から現在に至るまでの話を伺った。前震・余震・本震がどのような揺れであったかや、現在も車中泊を 	<p>最終日は各教室の責任者の名前をテプラライターで書き起こして貼っていく作業とプール指導を仕事として与えられている。2 人とも連日の野外でのプール指導によりかなり体力的には疲労しているため、水分補給をしっかりとしながら、必要に応じて交代で休憩を取るなどしてい</p>			<p>派遣学生は、本来の目的である学校における支援業務（登下校指導・支援、水泳指導補助、プリント印刷・仕分け、支援物資仕分けなど）を多様に行いながら、それだけにとどまらず、被災地へ赴いて状況を確認したり、教頭先生を中心とした学校の先生方に地震後の児童の状況についてお話を伺ったりするなど、大地震という想定外の災害に対する学校の対応についての学びを積極的に広げていった。現在、防災教育の文脈で指摘されている³⁾、教員としての防災対応の知識の習得と問題意識の向上に大いに繋がったことが推測される。</p>	

5. 派遣学生によるリフレクション

派遣から戻ったあと、両学生は支援活動の内容と学びに関するリフレクションを行った。派遣期間中に撮影した写真と上記の「活動日誌」の内容を参照しながら振り返った内容を、活動報告ポスターとしてまとめた(図1)。

左ページには、現地である益城町・西原村の地震による被害の様子だけではなく、馬刺しや傘などの地域の特産物が紹介されている。右ページには益城中央小学校の現在の教育活動の様子とともに、「ボランティア活動報告」として、「登下校指導」「支援物資の整理」「プール授業の補助」の姿が示されている。

「感想」として、学生 A は次のように述べている。

地震から 5 ヶ月近く経ってもなお、多くの方が仮設住宅での生活を余儀なくされている現状がありました。子どもたちの中には、「当日朝起きたら顔の横にタンスが倒れていた」と言う子もおり、心のケアの必要性を感じます。一方で、豊かな自然やおいしい食べ物に魅せられる日々でもありました。みなさん、次の休みはぜひ熊本へ！

大地震によって破壊された被災地の人々の日常生活が未だに「復旧していない」という事実(傾いた建物や避難所など)に対する驚きと、一方で、懸命にもとの日常生活に「復旧したい」とする人々の思い(「馬刺し」や「ビール」が楽しめる「元通りの」生活)との間のアンビバレ

ンツを実感しながら、限られた期間であるものの、その「一員」として学校生活の日常化=教育復興に取り組んだからこそ「ゆらぎ」のある見解が述べられている。

6. まとめにかえて

今回の学生スクールサポーター派遣事業は、実質 3 ヶ月程度という限られた時間の中での取り組みであったが、大学が主体となって行う災害被災地での教育復興支援活動のあり方に関して、とりわけ派遣先へのヒアリングおよびニーズ調査、派遣学生の業務内容、安全管理、そして派遣学生たちの学びの深まりについて、多くの示唆を得ることができた。今後も様々なニーズを捉えながら、継続的に支援活動に取り組んでいきたい。

謝 辞

ニーズ調査にご協力頂いた熊本県教育委員会学校教育課および社会教育課のみなさま、益城町教育委員会のみなさま、学生派遣を受け入れてくださった益城町立益城中央小学校のみなさま、そして貴重な夏季休業の時間を復興支援活動に当ててくれた学生の両名に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。



図1 派遣学生が作成した活動報告ポスター

註

- 1) 村上豊優室長の派遣記録報告(5月9日～27日)「教育復興プロジェクト 学校支援員報告～立春会用」
- 2) 地震後、復旧工事に従事するため県外からの滞在者が多く、熊本市内をはじめ県内各地の宿泊施設に空きがなく、高額となっている状況にあった。
- 3) 文部科学省は、「現在の防災教育における課題」とし

て、「学校における防災教育では、教職員等の学校関係者に防災教育の大切さやを理解させることが重要であるが、そのような防災教育の側面を発見できるような研修は十分に行われていない」ことを指摘している (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kaihatu/006/shiryo/attach/1367196.htm、2016年12月1日閲覧)